審 査 結 果 の 要 旨

（１）研究の目的に意義や独創性があるか。

国内外での人権擁護の議論の高まりを受け、教育政策を含む諸政策のなかに LGBTQ にかかわる施策を盛り込む動きが 2010 年代になって顕著になってきた。本論文はそうした動向を踏まえたうえで、日本における性教育が 1970 年代から 80 年代にかけて大きく変容していくなかで、いち早く同性愛/同性愛者に注目して問題を提起した“人間と性”教育研究協議会（略称：性教協）「同性愛プロジェクト」（1988-1991）にフォーカスし、それを担った教師たちがどのように自分自身を問い直し、多様な性のあり方にかかわる教育活動をつくりあげていったのかを分析した論考である。教育史の研究においては「ジェンダーと教育」にかかわる研究は活発に展開されてきているが、「「人間の性」（ヒューマン・セクシュアリティ）の教育」（間宮武）としての性教育の歩みについては十分な蓄積がなされておらず、とりわけ 1960 年代後半以降の世界的な第２波フェミニズムとともに展開してきた多様な性のあり方を求める言説や社会運動が性教育のあり方をどのように転換させるに至ったのかについては、国内においてはまだほとんど研究がなされていない。その意味で、本論文は現代日本性教育史研究の新たな領域を開拓する意欲作として評価することができる。

（２）研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

執筆者は、本研究を行うために、①性教育の担い手の課題意識と実践の構築の背景にあるジェンダー・セクシュアリティ史的状況への着目、②性教育団体において担い手の果たした役割、団体と個人との関係の記述、③性教育の担い手の思想や、行動が変容した過程への着目、という３つの位相から歴史を記述することを試みている。既存の性教育史研究は①と②を方法的枠組として展開されてきているが、執筆者は「同性愛プロジェクト」の担い手である教師たちの同性愛/同性愛者に対するとらえなおしがどのように生じたのかを析出すべく③を新たな枠組として採用し、ライフヒストリー研究を導入している。これは執筆者の問いを解決するうえで不可欠の試みであり、研究分野の新たな方法開拓として妥当なものである。

（３）研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

執筆者は、上記の３つの位相からの記述・分析を行うために、多様な資料を収集した。２部構成の論文の第１部「性教育を担った教師たちが同性愛/同性愛者を捉えなおす以前の日本性教育の史的研究」においては、日本性教育協会（略称：JASE）や性教協の機関誌や同性愛運動関連資料が主な資料であり、第２部「教師の捉えなおしを描くためのライフヒストリーへの着目」では、プロジェクトを担った３人の教師に対する相当量のインタビュー・データとかれらが所有しているプロジェクト関連の一次資料とが中心的な資料となっている。執筆者は、これらの資料を丹念に検討したうえで、「同性愛プロジェクト」が誕生する時代的／個人的背景とそこにおいて教師たちに生じた性のあり方をめぐる捉えなおしの過程を描き出している。資料の取扱は十分吟味されたものであり、その分析は適切であると評価することができる。

（４）研究の考察と結論が妥当であり，学術的な水準に達しているか

執筆者は、科学的な性教育をめざす JASE はもとより、人権を重視した性教協においても 1980 年代前半までは同性愛/同性愛者が十分に位置づけられていなかったが、プロジェクトに参加した３人の教師たちが、国内外の同性愛運動との出会いを通して、異性愛という自己の性的「マジョリティ」としての権力性を問い直し、同時に既存の性教育実践を支えていた「同性愛は異常である」とする「科学的知識」にも批判的考察を加えることによって、新たな性教育実践に行き着いたことを論証している。とりわけ第２部では、プロジェクトを担った３人の教師たちのライフヒストリーの共通性と差異性を丁寧に析出しており、読み応えのある論述となっている。その結論は妥当であり、十分学術的な水準を満たしていると評価することができる。

（５）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

今日 UNESCO は「人格と人格との触れ合いを含む幅広い概念をもった教育」としての「包括的性教育」（comprehensive sexual education）の推進に取り組んでいるが、性教育の歩みはそれが展開される社会のあり方を深く刻印してきわめて多様であることが予想される。今日、国際的なレベルで性教育の歴史を比較検討する試みが始まっている（Zimmerman 2015）が、執筆者の研究はそうした国際的な学術的関心とも響き合いながら、現代日本の性教育がどのようなプロセスを経て異性愛中心主義を問い直し、性の多様性やその自己決定という視点を獲得するに至ったのかについて、ひとつの知見を提供することに成功している。本論文は、時代が求める現代日本教育の歩みの歴史的検証という課題へのひとつの応答であり、現代日本性教育史研究の重要性を宣明する成果となっている。執筆者がプロジェクトから採りだした性教育実践の思想が、今日なお性教育の課題を検討するうえで示唆深い視点を提供していることも明記しておきたい。

以上の点を総合的に判断し、審査委員会は全員一致して、本論文が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）学位授与に十分相応しい優れた研究であると評価した。